「ふたなりメイドのらぶいちゃ性欲発散オナニーレッスン♪(仮)」

シナリオ：ハシダ　シュンスケ

原案:望月あんこ

キャラクター

弐珠司(ふたたまつかさ)
とあるお金持ちのお屋敷で働く新人メイド。一般家庭出身。
天真爛漫だがおっちょこちょいでミスが多い。
ミスの理由は性欲が溜まりすぎて集中できないからであり、先輩メイド長にオナニーのやり方を教わってからは一人前のメイドとしてみんなに認められるようになった。
葵さんのことは厳しくて怖い先輩という認識。
155cm、Hカップ、竿25cm、玉200ml、22歳

冷泉葵(れいせんあおい)
とあるお金持ちのお屋敷で働くベテランメイド長
代々御主人様にお付き合えしてきたそれなりに良い家系出身。
冷静に時に厳しく後輩を期待上げる。司ちゃんのことは可愛がっているがミスが多く心配している。
性欲が強いふたなりであることを主人は知っており、時たま性欲が限界に達したとき一週間ほど休みを取る。
160cm、Lカップ、竿16cm、玉500ml、30歳

１．導入

●朝ごはんのお皿を運ぶ司ちゃんは間違って、皿をぶちまけてしまいます。

司「ふあっ……すみません……旦那様。
大切な、お皿を割ってしまうなんて……

それに旦那様の服がこんなに濡れて
直ぐお拭きします……も、申し訳ございません！！

即刻片づけますので、お許しください。
お皿も、服も、べ、弁償しますので……

そんなことはしなくていい。
私は大丈夫ってそんな……

その……本当に申し訳ございませんでした」

司「わ、わかりました。
今日はもう下がりますね……」

司「うぅ……わたし、ドジやっちゃったなぁ。
どうして、こんな大きなミス、しちゃったんだろう……

最近ミスが多いからって
気をつけてたのにぃ……」

司「ふわぁ……」
葵「ちょっと司さん？　仕事中に欠伸とは感心しないわね」

司「ひっ……メイド長？」
葵「司さん。どうも気が抜けているようね？
最近ミスが多いわよ。
それに、ご主人様相手にお料理をひっくり返して
落ち込んでいるようだからって、様子を見にきたのに……
気が抜けているようなら困ります。
そんな態度が続くようなら……
減給や解雇だって視野にいれないといけないんだから」

司「あぅ……申し訳、ございませんでした。
今後はこのようなことはないようにします」

葵「もう、そう頭を下げたって何にもならないわ。
とにかく何か困っているなら、相談して頂戴？
あなたからすれば、先送りするしかない悩みでもね
相談してくれれば、解決するかも知れないんだから」

司「あー、そのぉ……」
葵「その？」

司「実は最近寝不足で。
起きても、寝たりなくて、まだふらふらしちゃって。
身体も、頭もぼーっとしちゃって
熱っぽくなっちゃうし……それで仕事が身に入らなくて」

葵「なるほどね。
寝不足が続いてしまう……か。
消灯後にするようなことなんて、何かあったかしら？」

司「……ぅう、それは」
葵「まぁいえないわよね。わかりました。
同じようなミスが明日も明後日も続いては困るわ。
司さん、今夜私の部屋に来てください」

司「え……呼び出しですか……」

葵「ええ、今夜。
消灯前に鍵を返すタイミングで来るように、返事は？」

司「はい……分かりました」

葵「ええ、じゃあまた今夜ね」

司「困ったなぁ……どうなるんだろ
やっぱり怒られるのかな……どうしよぉ……
でもいかないとなぁ……うぅ……」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

２．メイド長オナニー⇒新人にオナサポ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

司「あの……メイド長。
　すみません……その、司です……」

葵「ええ、司さんね。どうぞ、中で楽にして？
　そんなに怯えなくても大丈夫よ。

　別にあなたのことを叱るために呼んだわけじゃないのよ
　少し落ち着いて、あなたとお話しする場が欲しかっただけなのよ」

司「あぅ……」

葵「そうだ司さん。紅茶はいかが？
　どうぞ、そこの椅子に掛けて、リラックスして頂戴？」

葵「それより、紅茶はどう？　司さんのお口に合うと良いんだけど」

司「おいしいです……」

葵「でしょう？　来客用のちょっといい品なのよ」

司「私、此処に呼ばれたとき、すっごい怒られるものだと思ってました」

葵「ううん。そんなことしないわよ。
　まだお嫁さんが居ないこの家ではね。
　ご主人様の変わりにメイドの管理をするのも、メイド長の役目ですもの

　だから、あなたの健康管理も、言うなれば私の仕事なの。
　ここ最近のミスも私の落ち度ですものね。
　ご主人様にお願いして、明日はお休みにしていただいたわ」

司「そ、そんな！！　全部私のミスなのに……
　メイド長を煩わせるなんて、今日はきちんと早めに寝ます。
　明日から、ちゃんと仕事しますから……」

葵「司さん。何か勘違いしているようで悪いけど。
私はあなたの悩みが一人では解決できないことを知っています。
だから、あなたに自分の身体の付き合い方を知って
一層、仕事に集中してほしいと考えているのよ」

司「えっ……メイド長。それって、どういう？」

葵「あなたは秘密にしていたみたいだし。
だんな様も知らなかったことのようだけど……
私は、気づいていたわ。あなたって、ふたなりなのよね？」

司「そ、それは……メイド長、どうしてそのことを？」

葵「あなたがミスをする日、あなたから精子の臭いが漂っていたの。
微かだけどおちんちんの中に、出し切れなかった精子が残っていた。

あなたが寝坊していた理由。
それは、あなたがオナニーをしていたからなのね？」

司「はい……」

葵「それはね、正直しかたないことなの。
ふたなりの子は、多精子症の気も強いし、ホルモンバランスに影響が出るから睾丸から精子をきちんと出しきっていないと、体調に影響が出る子が多いのよ」

葵「分かるのよ、だって私もふたなりですものね」

司「えっ……嘘、メイド長。
ほんとに、おちんちんついてる……

葵「あなた、自分以外のふたなりを見るのは初めてなのね？
驚くのも無理ないわ。男性経験もない、同性のアドバイスもない。
それでは、あなたが体調を崩してしまうのも無理はないわね
ふたなりにはね、ふたなりのためのオナニー方法があるの。
今日は、あなたにそれを体験してもらおうと思います
いいわよね？」

司「ふたなりのためのオナニー、ですか？」

葵「そうよ。
あなたは欲望を全開にした正しいオナニーをしていない。
だから、体が満足できない。性欲を発散し切れていないから、何度もオナニーをしてしまい結果として慢性的な寝不足に陥ってしまう。

あなたには睾丸に精子があって、何となくむらむらするという理由で精子をただコキ捨てて、場当たり的な快楽を感じるだけに甘んじない――性欲という本能にしたがって精子を吐き出す、本当のオナニーというものを、実際に体験してもらうわ」

司「(ごくり、とつばを飲み込む)」

葵「司さん。いい反応じゃない……いいわよ。
そういう快楽に正直な姿勢は、今のあなたには必須なの。
それにあなた、私のふたなりチンポを見ても……嫌がるどころか、むしろ興味津々に見つめていた。そんなあなただからこそ、教えがいがあるというものね。折角だから、私のコレクションを見せてあげようかしら」

司「凄い……色んな玩具がある。これ全部、オナニーの道具なんですか？」

葵「そうよ。
このローションも、オナホールも全部大人の玩具。
今日はベットに腰かけて実際にオナホールを使ったオナニーをするから、あなたには、その光景を実際に見て、勉強してもらうわ」

司「これが、オナホール……ぷにぷにしてて、すごい……使い込まれてエッチで……これでおちんちんをシコシコするんですか？　それに、ローションも……そんなに……」

葵「そうよ。これは、睾丸から精子を搾り出すため、シリコンで作られた穴に、気持ちよくなるような襞と突起を刻み込んで、ローションでぐちゅぐちゅにした女性器の代わりなの……あなたも、使ってみたい？」

司「使ってみたいです……メイド長」

葵「だったら見ていなさい？　私の勃起したチンポをオナホールに挿入するところ……っ」

司「あぁ……すごい、メイド長のおちんちんぐちゅって入っちゃった……」
葵「そうよ、ローションを押し広げるように、おふぅ〜〜やっぱり、このオナホール、使い込んだおかげで違うわねぇ……」

司「(興奮した呼吸音)」
葵「んぉ〜〜っ、チンポに絡み付いてっ、襞で竿を擦ってくるっ……いいっ、いいわね……、よく見てなさい……そうやって見られれば見られるほど、私も興奮してくるもの」

司「はい……メイド長のおちんちん、ぬるぬるで……こんなにブルンブルンって震えて……わたし、こんなにエッチな格好で、声を出してシコシコしたこと、ないです……」
葵「それはいけないわねチンポは、こうやってシコるのよ……
　んっ、チンポから、最も気持ちよく精子を出すことだけを考えるの……
　あなたのオナニーに足りないのは、その意識よ、反省なさい」

司「はい……わかりました、メイド長……すごい、メイド長のおちんちん……オナホに擦れて、ローションが泡だってる」
葵「そう、オナニーはただシコるだけじゃダメ。一滴でも多く、張り詰めた金玉から精子を搾るために、シコるのっ、それがふたなりのっ、オナニーよォ」

司「あっ……あっ、あっ……そんなに腰を振って、オナホも、ぐちゅぐちゅってシェイクするみたいに……」
葵「ほっ、おぉおっ、おぅ〜〜〜んぉ〜〜〜っ、んっ〜〜うっ、おっ、おっ、ぉお゛〜〜いいわぁ、声が出てくるぅ」

司「そんなぁ……メイド長、そんな風に、声を出しながら……分かりました。ちゃんと見ます……私、勉強します……っ❤」
葵「そうよぉ……両手でマスかくようにオナホに擦らせるの、よぉくみておきなさぁい、学びなさい、そしてっ❤　欲望を、解放するのよぉっ❤」

葵「んふっ……その真っ赤にした顔っ、駄目よ……私以外に見せたら承知しないわ……メイドとしての貞淑さを守らないなら、厳罰を下さないといけないわねっ……❤」

司「やっ……❤　罰は、嫌です……ちゃんと、オナニー見ますから……❤　見させてください、オナニー。エッチなこと、学ばせてください……❤」

司「それにっ、メイド長のおちんちんみてると、私も、なんだかぁ……♥　お腹の奥が熱くなってっ♥　トロトロになったメイド長のおちんちんが、オナホに出たり入ったりするの、目が離せなくて……♥」

葵「ふっ、ふっ、うぅ〜〜〜、いい心がけね。もっと近くで見せてあげるわ。あなたにとってはじめて見るふたなりチンポですからねぇ……」

司「あぅ……おちんちん、速くシコシコしたい……エッチな勉強ぉ……こんなにすごいなんて……ふたなりのオナニー、私も早く体験したいですぅ♥　メイド長……♥　えっちぃ♥　こんなの……ぅぁ……」

葵「ふ〜〜〜、いいのよ。あなただって、精子が欲しくなってしまうことは仕方ないことなのよ。だってあなたは女の子ですもの。そして、ふたなりですもんね。自分から、シコシコしたくなってしまうことも、しかたないことなのっ」

司「んぁ……♥　やめて、ください♥　メイド長……♥　見ますっ♥　見てますから……エッチな姿見てますから……♥　ぁう……♥　そんなずぽずぽ、して……びくびくしてぇ……♥」

葵「だからぁ、おらっ、見なさい。見なさい♥　もっと見なさいぃ♥……ひーっ、私の、恥ずかしいオナニーみてっ♥　もっと、お、おっ♥　ほっ♥　ふぅ〜♥、心から欲しがるように見つめなさい……♥」

司「……ぁっ♥　ぁ……♥　そんなぁ……そんなことないです♥」

葵「いひぃ〜、いいわよぉ……♥　あなたのふたなりとしての性欲は、本物ねぇ♥」

葵「否定したってだめよぉ♥初めは恥ずかしそうに♥　見ていたのにっ♥　んひっ……もうこんなに食い入るように見つめるなんてぇ、あなたの性欲は本物ぉ♥　その変態性欲に免じて……司さん。あなたに精子を恵んであげる、このまま、あなたにかけてあげる♥」

司「かける……かけるって、ざーめん……♥　メイド長のざーめん……♥　どうすればいいですか？

葵「そうよ、あなたの性欲をより深く高めるためにはね、これは必要な処置なのぉ……治療よ。わかってるわよね」

司「……んあ……わかりました。射精、してください。メイド長……」

葵「ほらっ、受け止めるように口をあけて……私の全力射精を受け止めなさいっ

葵「あ〜でる、オナコキされた精子、金玉からぬぶり出るぅ〜〜」

司「んっ……あっ、あっ……ぁ〜〜♥ ザーメンすっごい出て……かけられてる……、すっごい濃いの……ぶりゅぶりゅ出して……きもちよさそぉ……♥」
葵「ひっひぃ〜〜〜♥ おっ、んおっおおぉおおっ、おお”〜〜〜〜〜っ♥ 後輩メイドの顔に、精子塗りたくるのぉ最高ぉ、性欲が満たされるわぁ♥」
司「……んんっ、ぷはぁ」

葵「あなた、本当にエロの才能がお有りのようね、見直したわ司さん……そんなにエロい表情で、私の精液を飲み干すなんて、さすがの性欲ねぇ……」

司「けほっ、うぅ、メイド長。ありがとう、ございまひゅ……」

葵「ええ、えらかったわね……
あなたのメイドとしての奉仕心見せてもらったわ」

司「あの、メイド長」

葵「なぁに？ なんでもいってみなさい？」

司「うぅ……もうだめぇです。
おちんちん、しこしこさせてください」

葵「わかってるわ。あなたも、もう限界みたいだし……ええと
司さん。あなたが私と秘密を一つ共有した記念に、この新品のオナホをあげるわ。司さん。これを使って、正しく乱れられるかどうか、私に見せてみなさい？」

司「ひ、ひひ……そんなの、はずかしすぎます……
司、そんな恥ずかしいことをいまからするんですか？」

葵「そうよ、でもいいじゃない……
そんなに物欲しそうな顔をしてるんだもの……
自分に正直になって、もっと正直に快楽を欲しがりなさぁい♥」

司「はいっ……メイド長……
司、ぬきたい、ぬきたい、ぬきたいですっ……♥
精子だしたいですっ、おなほにザーメン、ぶりぶりだしたいです……」

葵「ええ、じゃあオナホを準備しましょうか
ふふ、上手よ。そうやってローションをオナホの口に入れなさい？
ふたなりはチンポも大きいから、相応にカリのサイズもある。

正直入れすぎて溢れるくらいの方が、オナニー中はいいわよ。
どうせ、気持ちよくなるんだから、贅沢にやりなさい。
この一回のオナニーで後悔しないようにね」

葵「司さん？快楽をむさぼるのどうすればいいのか、本能で分かるわね？」
司「はいっメイド長……わかりますっ……」

葵「ふふ、もう……葵でいいわよ。メイド長じゃなくて、名前で呼んで？」
司「はい……葵さぁん……司。しごきかた、わかりますっ……オナニーできますっ」

司「……んぅ～～～っ、はぁっはぁっ……はぁっ……❤ はいったぁ……❤ オナホールにおちんちんはいったばっかりなのにぃ、もぉきもちぃ❤ ……これぇ、きもちぃ❤、だめっ、こしっ勝手にうごくのぉ……❤」
葵「そうよ、手で優しく包みこんで、にゅぷにゅぷ～～～って入れなさい。いいわよ、おちんちんがもう、オナホールに媚びちゃってるわ。でも心を落ち着けて、最初はホールの感触を味わうのよ……」

司「あじわうぅ……やさしくぅ……おぉ～～ひだっ、くるぅ……うぁ……おちんちん、きもちぃ……❤ もっとぉ……もっと、ザーメンだすのぉ……」
葵「やさしくし～こ、し～ぃこ、そう、いいわよ……楽な姿勢で、身体を投げ出すようにして、チンポに意識を集中しなさい❤ しこってる間、これが、精子を搾り出すための行為だって常に考えなさい❤」

司「ぁう……しますぅ……❤ んぁ……❤ おちんちん、ぐにゅぐにゅのヒダでぇ……あっ❤ んっ❤ もぉ❤ きもちぃよぉ……❤」
葵「さ、オナホールのこと、もっとチンポで意識してみて……？中のヒダと突起をローション以上に意識してみるだけで、気持ち良さが変わるのよ」

司「あっ……あっ❤ あっ❤ あんっ❤ はいぃ……しゅきぃ……おなほーる、すきぃ……❤ だきすきぃ……❤ えへへ❤ しゅきぃ……❤ えろえろな気持ちで、おなほーるするの、すきぃ❤ しこしこすきぃ❤」

葵「さ、どんどん意識しなさい？　あなたのチンポに快楽を与えてくれる穴を好きになるの……いいわね❤　あなたの表情から、心が快感に支配されてるのが分かるわ❤　もっと、エロく自分を高めながら、シコシコなさい？

葵「そのまま、もっと、上り詰めるの……いいわね。あなたの体、こんなにエッチに実っているのに欲求不満だなんて、勿体ない」

司「ぁっ……❤　葵さぁん……❤　司のおっぱい、触ったらだめぇ……❤　あっ❤　あっ❤　そこぉ❤　もぉ❤　もっときもちよくなるぅ❤」

葵「全身を愛撫される感覚、いいでしょう？　満足するエッチのためには、全身すべてでイク、もっと快楽を肉体全てで求めなさい？」

司「あっ❤　あっ❤　あっ❤　はいぃ……❤　ありがとぉございますぅ❤　気持ちよくなってきてますぅ……」

葵「それにしても、司さん。あなたの、本当に――才能があるわ。
　ほら、乳首を愛撫されてるだけなのに……もう気持ち良くなってきた」

葵「そしたら、一度手を緩める」

司「えっ……やだぁ……❤　いけないぃ❤　これじゃ、いけないのぉ……❤」

葵「一度目の射精の波を抑えて二度目で全力の射精をすることを心がける」

司「んっ❤　んっ❤　おっ❤　おっ❤　っぉ……❤　ほぉ〜〜❤　んぁ……❤　わかり、ますぅ❤　これからはぁ❤　がまんするのぉ❤」

葵「手の動きを緩める代わりに、私の指があなたの胸を愛撫する感触を良く味わって……そうよ、出したくても出せない。今は私がやってあげているけど、これからは、あなたの心の中にあなたに快感を味あわせるために、あなたの射精を邪魔する誰かを作り出すの……

葵「ほら、もっと気持ちよくなれるようにキスしてあげるわ……」

二人「ちゅっ❤　ぶちゅ……❤　れるれろ……れりゅっ❤」

葵「いいわ、もっともっと高めなさい――いいわよ。
　でも、駄目だと思っても、射精しちゃいけないわ」

司「だめっ、だめっ❤　だめぇ❤　もぉだめぇ……❤　きもちぃ❤　だめっ❤　でるっ❤

おちんちんいくぅ……ザーメンでちゃうぅ♥　この玩具にしぼられちゃうぅ……♥　イッちゃうぅ……♥　いくっ♥　いくぅ♥　いくぅ……♥」

葵「止めなきゃいけないという意思を持ったうえで、手が止まらなくなる。それがイキ時よ、睾丸に力を入れて精子を絞り出すことを意識して、オナホールを孕ませるつもりで射精するの――あとはもう、好き勝手イキなさい。いいわよ、そのまま全力で射精なさい……♥」

司「おっ、お♥　お♥　おっふぅううう♥♥♥
ザーメン、でりゅっ♥　でましゅぅ……♥♥
みせつけて、ざーめん、でるぅ……♥

葵「あっ♥　あっ♥　あ〜〜〜♥」

葵「司さん。あなた、文字通り噴水みたいに射精して……♥
あなた、本当に才能のあるふたなりね……♥」

司「あおっ……おっ、おおおぉ〜〜♥
おひゅっ、ほぉ〜〜〜♥　ほぉ〜〜〜♥」

葵「もう、殆ど言葉にならないみたいね。
これだけ、全てを解放して、満足すれば――今夜はぐっすり眠れるわ。」

司「はーっ♥　はーっ♥　はーっ♥

葵「後は、私がどうにかしておくから、翌朝、念入りにシャワーを浴びることを忘れないように――意識、朦朧としてるわね」

葵「司さん。付き合ってくれて、ありがとう……
見つからないように送ってあげるわ」

「おやすみなさい。司さん。
洗ったオナホールは明日、お部屋に届けておいてあげるわ。
これからも、励みなさいね」

司「はぁい……
葵さん。ありがとうございました……」

司「――ふぅ、すっごいことしちゃった。
葵さん。綺麗だけど怖い先輩だっておもってたのに……
私のミスも、カバーしてくれて、あんなことまで……
すごい、優しいひとなんだなぁ……

＝＝

3．フェラチオ、尿道攻め

＝＝

司「う～～おふ～～っ、ひゅっ、ひゅっ、ひゅっ……
　おちんちんいくぅ、ちんちんいくぅ、ちんちんいくぅ、ちんちんいくぅ
　イグっ、ちんちん。オナホにしごかれてイグッ、クゥ～～❤❤」

司うぉ……❤　ぉっ……❤　おぉ……❤　ぁ……❤
　あぁ……オナホ、壊れちゃった……❤

　どうしよぉ……おちんぽしごけない……それに、私ぃ❤
　これだけじゃ満足できなくなってる気がする。
　メイド長に……相談してみないとなぁ……❤」

葵「あら、司さん。
　あなたの方から、相談なんて昨日の今日なのに、珍しいわね」

司「すみません、メイド長。
　その……お恥ずかしい話なんですけど、これ。
　オナホール、壊しちゃいまして……」

葵「あら、あら……」

司「わたし、こういうの何処で売ってるのか、知りませんし、それに、折角もらった物をもう壊しちゃうなんて、申し訳なくて……」

葵「そんなの、いいのよ。物だから壊れるし、もともとはふたなり用のじゃないんだから……それだけ、あなたのチンポが大きくて、性欲が強いってだけなんだから、気にしないで。
それに、問題はそれだけじゃないでしょう?」

司「はい。」

※心の中の声

司「(何から、何まで見透かされちゃってる……)」

司「わたし、その……オナホールを使って遊ぶようになってから
　もっと、その、エッチがしたいって気持ちが強くなるようになっちゃって……毎日、言われた通り出来る限り本能が満足するようなオナニーをしているのに……如何すればいいの

か分からなくて……」

葵「なるほど、なるほど
今まで自己流のエッチで生きてきた反動で、正しいオナニーをするようになって、性欲がより強く出てしまうというのは、聞いてはいたけど、実際に見たのはあなたが初めてよ、司さん

もちろん謝る必要はないわ。
それよりも、また欲求不満になられても困るし……
あなたの変態性欲を前向きに解消して行きましょう」

司「へ、へんたい？　私が変態ですか？」

葵「そうよ。悪いけど、あなたは変態。
気持ち良くなるため、性欲を解消するという大義名分の為なら……

どんなエロい事でもできる。
そんな慎みとは正反対の稀有なふたなりなの。

それでも、あなたが出来ることはね――
より深い変態行為に身を沈めることだけよ

葵「いいわね……あなた、このやり取りだけで、もうチンポを大きくしてる。
それじゃ、私からあなたに、今まで以上の快楽を味あわせてあげるわ」

葵「そうね……こういうのはどうかしら？」
司「なんですか、それ……細い棒？」

葵「そう、これは尿道パール。
今から、あなたのチンポの穴にこれを入れてしまうのだけれど……
それがどういうことかは分かるかしら？

これは射精を止めるための玩具ってだけじゃないのよ。
ふたなりの体の中にある、射精をするための器官を直接刺激することで、あなたは文字通り尋常じゃない快楽を味わうことになるの」

どう？　楽しみでしょう？
言わなくても分かるわ。もう、そんなもの欲しそうな表情をしてるんですものね。さ、抵抗せずに快楽を貪る為の準備をしましょうか」

葵「チンポを出しなさい？」
司「はいっ……」

葵「――いいわね。あなたは本当にいい子よ。
私の言いつけに、心から従えるあなたには――
私だって本気で奉仕したくなっちゃうわ……
あなた、フェラチオは御存じ？」

司「知りません……そういうのは」

葵「知らないの？　だったら、してあげるわ……♥」

司「あぅ……葵さん、やめてぇ……そんなに吐息たっぷりに
おちんちん近づいたらだめぇ……司、耐えられないよぉ……
葵「こんなに大きいチンポ。咥えるだけでも一苦労ね。
それでも、私のおくちはすごいのよ……？
きっと、あなたは直ぐにでも腰砕けになっちゃうわ……

司「だめっ……おっ♥　おぉ♥　それっ、らめっ♥　おちんぽぉ♥
お口の中でぐちゅぐちゅなめるのだめっ♥　らめぇ♥　らめぇ……♥
こしぃ……くだけるぅ♥　おちんぽとけちゃうぅ♥　葵さぁん……♥
らめぇ……それしゅきぃ……♥　あうぅ……♥♥」
葵「んぼーっ、じゅぷっ、ちゅぶっ、ぶっ、んごっごっごっんぐっ……
んぐぅ～～れる、んぶっ、ぶっ、ぶふ～～んふふっ……
むぐっ、ぶぽっ、じゅぷっ、んぷっんぷっ、んんっ……
れる、れろれろ……ちゅぽっ♥」

司「(涙目で荒い吐息)」
葵「どうかしら？　司さん……れろぉ……腰がへこへこしてきたわね……
あなたの精液、もう登ってきてる。」

葵「それにしても、貴方の反応、もう完全に変態のそれね……」

司「そんなこと……」

葵「イクために、気持ち良くなるために、そんなに喘いじゃって……恥ずかしいんだぁ……完全に快楽の虜という訳かしら？」

司「そんなことないですぅ……ずびっ(鼻をすする音)」

葵「いいわよ、気持ち良くなりなさい。心から、体全てで快楽を受け入れるのがあなたの仕事よ」

司「おっ……ぁっ……❤ ぉ❤……んはぁ……❤ そんなぁ……❤ 変態じゃないですぅ……❤ だめっ❤ やめてぇ……❤ だめなのぉ……❤ きもちぃのぉだめぇ……❤ きもちぃのだめぇ……❤ きもちぃ……❤ きもちぃよぉ……❤ でりゅぅ……でりゅっ……❤ ざーめんでるぅ……ざーめん❤ でるぅ……」

葵「れる……れおぅれろっ、私の舌で、舐めしごかれるだけで、もうそんなに朦朧としちゃうなんて、ほんとにあなたってっ、んふ……じゅぶっ、じゅっ、じゅぷっじゅぷっ……変態だわ。何を言っても、もう、言い逃れなんてできないわよ……れるっ、んんふ……ちゅぶっ、じゅぽっ、んっ……ほら、精液が上ってきた。あなたのチンポはもう、気持ち良くなりたくてしょうがない——正直になりなさい。んぉっ……ふぉ～～～れじゅるるるっ❤ ぬぐっ❤ むぐっ❤ んふ～❤ ふ～～、ふ～❤」

葵「で～も、だめ。お預けよ」

司「で、でにゃい……❤ いけないぃ……❤
どうしてぇ……どうしてぇ……なんでぇ？」

葵「なんでって、同然でしょ？
これだけじゃ、あなたは満足しないもの……
生の肉と奉仕の刺激だけじゃ、あなたは完全にチンポに全てを委ねられないわ……だから、今からは——これの出番なのよ」

司「それ、さっきのぷじー、ですか……？」

葵「司さん。そんなに目の色変えちゃって……・…もう、釘付けね？

あなたの視線がこのプジーに向いたの、わかってるわよ……❤」

司「そんなことない……早く射精させてください」

葵「本当は、これ……欲しいでしょう？
未知の快楽。チンポや、乳首を触られるだけじゃない。
また別の絶頂を味あわせてあげられるのよ」

司「……別の絶頂、それ本当に、気持ちいいんですよね……
騙してないですよね……ちゃんと射精させてくれるんですよね……」

葵「騙してなぁい……大丈夫」

司「じゃあ、お願いします……司のおちんちんに、プジー挿入してッ」

司「んっ……おっ、おっ！？　これぇ……知らない❤
まって、やめてぇ……❤　葵さん、これっ、怖いっ……❤
気持ちいいのっ……怖いですっ❤　あっ……❤　んっ……❤
やだぁ……❤　やだっ……❤　これっ……❤　おっ……❤
ぐっ……んっ……おっ❤

葵「正直でいい子ね……いいわ、入れてあげる。
でも、勇気を出してよかったでしょう？
チンポの穴を押し広げる冷たい感覚……もう腰ががくがく言ってる。
それだけ勃起して快楽を味わっていたのだから……
体が性欲の虜になってしまっているのは良くわかるわ」

司「おっ❤　んっ❤　んはぁぁぁぉ……❤　おっ❤　おっ❤　おっ❤　おぅ〜〜〜〜っ❤❤
ごりゅごりゅしゅる……❤　ごりゅごりゅしちぇるのぉ……❤　おちんぽ❤　いくっ❤
おちんぽのなかこしゅられていくぅ……❤　のうみそ、イってるっ❤　んぁぁぁぁ゛あ゛あ゛
゛……もうイクぅ……❤　イキ死ぬぅ……❤❤❤」

葵「いいわ、もっと変態的にこのパールの味を感じるの。
そして、腰の奥、広がる快感を感じなさい——あなたの体の全てが快感に支配されるのよ。
素晴らしい瞬間ね。頭の中すべてが馬鹿になって、射精以外の快楽を味わっているのに射精
だけを求める——この瞬間に感謝しなさい？　ふたなりとして生まれてきた自分にありが
とうって思いながら、深く、深くイクのよ？」

司「おっ❤　おっ❤　おっ❤　おっ❤　……イクぅ……❤　いぐぅ……❤」

葵「いいわよ、イッていいのよ……❤

あなたの背徳的な欲求すべてを、受け止めてあげる……貴方の体の奥から快感を感じなさい❤

司「いぎゅ……❤　ぁあぁぁあああ！！　いってるぅ……❤
あたまぁこわれるぅ！？　なにこれっ……❤　ちがぅ……❤」
葵「……いいでしょう？　イってるのよ。
今まで理解できなかったイキ方かしら」

司「ちがうぅ……❤　んおぉおお"ぉお"……❤❤❤
いったのにぃ……❤　イっだのに……❤❤❤」

葵「でもいいじゃない。あなたの体は確かに今イッてるのよ？
快感で全身が蕩けそうかしら？

葵「それとも、もっと、もっと深い刺激を感じなければ満足できないの？」
司「(荒い吐息)」
葵「ふふ、わかってるわよ。こんなに体がイッてるのに射精できないお陰で、本気で満足できないのね？　深く深くイったのに、精液が出てないから、あなたはまだ満足できない……ホントなら、精子を出すよりも、強いイキ方をしたのにね」

葵「でもこれが、別のアプローチでイクってことよ。
あなたの精子、まだ出させてあげない。そのかわり、何度でもイきなさい？　いいわよ。寸止めなんて、健康に悪いものね」

司「おっ……んっ❤　これだめぇ❤　おちんぽっ……❤　すきになるっ❤　すきになりすぎますっ❤　だめっ……またいくぅ……❤　うぅ、うぅう……❤　んぁ……ぁあぁっ❤❤❤❤……あぁあ"〜〜っ❤」
葵「だからイキなさい？　でも、射精は――もっと、もっと素晴らしい一瞬を感じてほしいの、あなたの脳がもっともっと快楽を求めて、一人のメスとして全身を震わせて屈伏する瞬間でなければ満足しない。

葵「あなたは変態として、本来人間が満足する領域で満足しなくなってしまった。可哀想なんて思わないわ。それこそが、ふたなりにとって何よりも幸せな状態ですもの」

司「らめぇ……もう、またぁ、いってるぅ……❤　出させてぇ……射精させてぇ……❤❤❤
いかせてくださいぃ……❤　お願いじまずぅ……❤　んいっぎぃっ……❤　いぎだいぃ

……❤　いぎたいぃ……❤❤　いぐぅ……❤❤❤」

葵「あなたがイク、いきたい。イカせて欲しい、その声を聴くたびに私だって、興奮しちゃうわ。ほら、もっと貪欲に気持ち良さを、快感をむさぼりなさい？　あなたのチンポ、一分一秒と無いくらい痙攣して、キンタマだって痛い位に持ち上がってるのに、あなたは全く満足できない。イキたい、イキたいわよね。いいわよ、イキなさい」

司「んぁ……❤　ぁ……あ〜〜❤❤　ぅ〜〜❤」

葵「ほんといいイキっぷりね。そのイキっぷりに免じて、あなたに新しいおもちゃをあげるわ……あなた用の新しいオナホールよ。これに、ローションをたっぷり垂らして……

葵「あなたの竿をしごいてあげる？」

司「まって、なにするんですかぁ……やだぁ……そんなのだめぇ……わかる、わかるから……だめぇ……きもちいいぃのだめぇ……ゆるしてぇ……もうゆるしてください……もうだめぇ……」

葵「嬉しいでしょ？　これの気持ち良さ、あなたもよくわかってるわよね？　チンポの内側と外側の両方から気持ち良くなるって、これ以上ない快感なのよ。そんな泣きそうな顔しないでちょうだい？　それとも、誘っているのかしら？」

司「んごっ……❤　おぉっ❤　おぉおおおおっ❤　んぐぉおおおおおっ❤❤❤　だめぇ……❤　おちんぽ❤　きもちぃいヒダでゴシゴシしないでぇ❤❤　あぁあああああ！！　たすけてぇ……❤❤　たすけてぇ……❤❤　ぃっひぃ〜〜〜〜っ❤❤❤　いぐぅ……❤❤❤　いぐのやだぁ……❤❤」

葵「悪い子ね。司さん。言葉で拒否するなんて、体に味あわせないと分からないのかしら？　そんな獣のような声で叫んで腰を振り乱して、私が抑え込んであげないと、素直に快楽を貪れないのかしら？　いいわよ、それを上手く教育してあげるのも、私の役目ですものね。幾ら叫んだってこの部屋は防音処理がされているのだから、諦めなさい。射精できない自分の体に快感が加わるのを諦めなさい？

司「やだぁ……やだぁ❤❤　いぐぅ……❤　もぉイグぅ……❤❤　いくぅ……❤❤　いっぐぅおおおぉおおぉ〜〜〜❤❤❤　っふーっ、ふーっふーっ❤　あうっ〜〜〜❤　そんなぁ……❤　やめてください……❤　やめてくださいぃ……❤」

葵「そうやって、堅くなに拒んでも、チンポはイク、チンポはイク、チンポはイク……イク〜〜〜❤　もうイッちゃったのね。こらえ性の無いチンポ、でもそれ以上にあなたの全身が

快楽を求めてる……満足できない。
出来ないわよね。あなたはふたなり、極上の変態だもの。
幾らイっても、射精しないと満足できないのよ。

葵「逆に言えば、どんなに変態的な行為をしたって、射精しなければ満足したと言わなくていいのよ……ほら司さん？　オナホールは自分でしごきなさい？」

司「うぅ……はい……はいぃ……❤」

司「んぁっ❤　んぁ❤　ぁっ❤　ぁ❤　おっ❤　んぉ〜〜〜っ❤　おぉ〜〜〜っ❤　んほぉ〜〜❤　んぉ〜〜〜❤　んぉ〜〜〜❤❤❤　いぐぅ……ぅ、いぐぅ……❤❤❤　いぎましゅ……❤　まらいぐから、だしゃせてぇ❤」

葵「私は、あなたのプジーをしごいてあげる。一番の快楽は自分で感じるのよ。いいわね〜〜〜。いくらしごいても、頭が快感を感じるだけで真の満足はしないとわかっているのに、あなたは、自分を慰める為にチンポをしごかずにはいられない。可哀想――でも、それがふたなりという生き物なのだから、仕方ないわよね」

葵「もっとイキなさい――でも、射精はまだ駄目。あなたの、敏感になった全てに快感を味あわせてあげる」

司「んっ……❤　これっなんですかっ❤」
葵「れろっ……どうしたのかしら？」

司「これ……きもちぃい……❤　えへっ……えへっ……　わかりましたぁ……❤」
葵「司さん。あなたの耳に、ゆっくりと舌を這わせているだけよ……これも、あなたの体に、他の快楽を味あわせてるだけ……」

葵「ほら、あなたも、片手が開いているなら、自分の体に体に快感を送り込みなさい――いいわね。頭がもう朦朧としてる、もう自分がどうなってるか分からないくらい気持ちいい……いいわよ、そのまま、快楽を貪りなさい？」
司「おっ❤　おっ❤　んぉ〜〜〜❤　全身イギまぐってるぅ……❤
　んぁっ❤　あぁ❤　あぅ……❤　いぐぅ……❤」
葵「んじゅっ……ぷぽっ……じゅるっ、ちゅるっ❤
　じゅるっ、れりゅっ、れろっれろっ、れろぉ……はぁ〜〜〜❤」

司「(荒い息)」

葵「いいわねぇ、もう、後は射精するだけ……ぇ、あなたの体。
何度イッたかしら？　女の子の快楽抜きでこれだけイクなんて――あなた、あなたって人には、ご褒美、上げないといけないわね……❤」

司「(荒い息に、えへ笑いが混じる)」
葵「ついにあなたの変態性の全てを許される時が来るの。
脳で、乳首で、尿道で――チンポの全てでイク、イクのよ。
そして、射精する。あなたに射精を許してあげる」

葵「イクことだけで満足できなくなってしまったあなたの体が本当に求めているものですものね。いままで、ため込んできた快楽を解放する瞬間が必要でしょう？」

司「(幸せね？って聞かれてから)……しあわせですっ」
「(本当に気持ちよさそうって言われてから)きもちぃですっ……」
「(あなたの性欲がこれほどのものだと思ってなかったわって言われてから)ありがとうございますっ！！
(きもちいい、きもちいいわねと同時に)きもちぃ……きもちぃよぉ……❤❤❤」

葵「幸せね？　本当に、気持ちよさそう。」
「あなたの性欲がこれ程の物とは思ってなかったわ。」
「きもちいい、きもちいいわね」

葵「さ、一番きもちいい瞬間を味わうのよ――尿道パール、一気に抜いてあげるわ。5カウントの後、あなたのチンポはね。思いっきり尿道を刺激された瞬間にイクそして、キンタマから全てを出しきるの……

5、偉かったわね……あなた、本当に教えがいがあるわ。
4、この全力でイった感覚を体に刻み込みなさい？
3、そして、明日も、此処に来ること。
2、あなたが味わったこと無い快楽を味あわせてあげる。
1、そうすれば、あなたも欲求不満を満たすのが上手くなるわ……。

……ゼロ。
これは変態として、最初の階段を登った御褒美よ。
司さん。射精を許可します……んふふ、本当にすごい射精」

司「んぁ"あ〜〜〜〜〜〜っ❤❤❤　いぐっいぐぅいくういくっ❤❤　でりゅぅ……❤　拡張おちんぽからびゅるびゅるぅ❤❤　でるぅ……❤　どまらないぃ❤❤　おちんぽぉとまらないのぉ……❤❤❤　らめぇ❤　とまってぇ❤　おちんちんとまってぇ……❤　あぅ……❤❤❤」

葵「これは絨毯に染みが残るというレベルじゃ済まないわね。
　チンポの穴拡張されたお蔭で、これ以上なくあなたの精子がまき散らされているのが分かるわ。これだけ強く深い射精ができるだなんて、すこし妬けちゃうわ。あなたの姿、みていたら……私も我慢できなくなっちゃいそう」

司「イグ……いき、ました……❤　射精……満足しましたぁ……❤❤」

葵「司さん。偉いわね。
　これだけの仕事をしたのだから、あなたが朦朧としちゃうのも仕方ないわ。今日は、もうここで寝ていきなさい？　また明日、仕事が終わったら此処に来ること。今日、味わえなかったもう一つの快感をあなたに教えてあげる……❤」

葵「あなたが寝付くまで頭、撫でていてあげるわ。
　そのまま、おやすみなさい」

司「ひゃい……おやすみ、なさい」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

４．おまんこも触ってみる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

葵「あら、速かったじゃない。
　期待していたとはいえ、律儀に来てくれて嬉しいわ」

司「そんな……私仕事の為ですから。
　期待なんてしてないです」

葵「ふふ、いいのよ。
　口ではどういったって、あなたは抵抗なく此処にいるんだから
　それに最近、あなたの仕事にもキレが出て来たって、ご主人様からもお褒めの言葉を頂いているのよ。あなたにも肉体的な欲求を満足させることが、自分の調子を良くすることだって、なんとなく実感があるでしょう？

司「それは……そうですけど」

葵「だから、司さん。
　あなたは自分を解放すること、気持ち良くなること……
　別に、卑下しなくてもいいのよ……❤」

司「あう……メイド長。
　それより、今日ここに呼ばれた理由を教えて頂いてもいいですか」

葵「ああ、そうだったわね。
　あなたがかわいすぎて、つい、からかっちゃったわ」

司「葵さん～～」

葵「時に、あなた、オナニーの時には、チンポしか弄らないのかしら？」
司「な、メイド長、唐突に何を聞くんですか？」
葵「当然の質問よ。
　ふたなりだって、あなたほど性欲が強く、発散が難しい子っていうのは少ないの。あなたが満足できない。あなたの体がより深い快楽で射精を求めるっていうのには、相応の理由があるように思えてね」

葵「このまま、何日かに一回、オナホを壊す生活をしていると――
流石にこの館のお給料がいいとしても、お財布が厳しくなるわよ」

司「うっ……それは、流石に困ります……」

葵「でしょう？
だからこそ、あなたにはチンポの快楽だけじゃなくて、女の子としての快楽を味わって、そして虜になって貰わないと困るのよ」

司「それって……どういう？

葵「司さん。あなた、処女よね？
それもあなたはオナニーをチンポで覚えて、そのまま成長してきた」

司「……そうですけど、駄目なんでしょうか？」

葵「ダメってわけじゃないけど、おまんこでイクのはね。
凄いわよ。射精するときの鋭い快感じゃなくて、昨日、イキつづけていたときのような、深く抜けない快楽の波にのまれて……快感に強いふたなりの子でも、しばらく動けなくなるほどなのよ」

司「あぅ……そんなにきもちいいの。動けなくなる、くらい。
司でも、そんなにイケるんですか？　そのくらい気持ちいいんですか？」

葵「……司さん。興味津々ね。
流石は、私が認めた変態という所かしら」

司「ち、違いま……」
葵「違わないわ」

葵「ふふ、参考に教えてあげる。
ほら、ベッドの前に座ってよくみなさい？」
司「うっ……メイド長の……すごいエッチな形……❤」

葵「私のマンコ、あなた、触ったことも無いとしたら、他人の生のものをこんなにまじまじ

と見るのも初めてなんじゃないかしら？」

司「そうです……こんなまじかで直接は……」

葵「でしょう？　これもいい経験になるんじゃないかしら？　これが大陰唇、襞になってる奥におマンコの穴がみえるでしょう？　ふたなりの体は、ちょっとずつ違うっていうけど……此処は大抵一緒、あなただってついてるでしょう？」

司「すごい……メイド長のおマンコ、エッチなにおいがします。
なんか、もうおちんちんが大きくなってくる、みたい……」

葵「そう？　それはあなたの体が、私の体で発情してる証ね。
昨日あんなに絞ったのに、もうこんなに興奮するなんて――
私も濡れてきちゃいそう。どうぞ、実際に触って感触を確かめてみなさい」

司「……葵さん、いいんですか？」

葵「ええ、チンポでオナニーするなら、本物の感触も味わっておかないと損よ。
ふたなりの子だって、チンポとマンコのどっちでオナニーするかで満足度が変わるなんて、実際やってみないとわからないんだから、この穴、オナホールの方が与えられる刺激は大きいかもしれないけど、女の子の温もりや、臭い、感触、声、全てを感じるには――此処じゃないといけないの」

葵「いいわよ、弄ってみて……ふふ、もう周りを触られてるだけで、濡れちゃった。あなた、ちゃんと爪を切ってるの、えらいわね……実は、こうなるって期待してたんじゃないかしら？」

司「そんなこと……でも、葵さんの穴、ほんとに……もうトロトロで……」

葵「いいわ、いいわよ……
あなたの指の感触、確かに感じるわ。
あなたの指を私のマンコが食い絞めてるの、分かるでしょう？
これをおチンポにするんだもの、世の殿方ががっつくのも分かるでしょう？」

ん……そうよ、指で解すように、壁を擦るのを意識して……
ゆっくりだって、気持ちよくなれるわ。
司さんも女の子だから、何となく、分かっちゃうのかしら？

それに、あなたの手つき、たどたどしいいけど、私を気持ちよくさせようって言うのが伝わってきて……いいわね、届かないけど、頭をなでたくなっちゃう……それにみて、私のチンポ、もうこんなに大きく勃起しちゃった」

葵「ふたなりにとって、マンコの快感がどれだけ大きいか、わかってくれたかしら……それにしても、あなた、上手ね、ほんとに……そう、そこのコリコリしてるところ、気持ちよくなったら浮かんできちゃうのよ……そこがGスポットなの、細かい仕組みは考えなくていいわ。

ふたなりの子はそこをいじられるのが、弱いのよ……重点的に指を当てて、んぁ……はっ、はっ、指マンされて、気持ちよくなるっ❤ なってるぅ❤、後輩のメイドに指マンされて……今日はじめて、マンコを触ったような子供にいいようにされてる❤」

「いいっ❤……んっ、いいわよ❤3本の指全部で擦りあげなさい。
私に……快感を与えて、悦ばすなんて、そう許されることじゃないのよ……んっ、んっ、おっ❤、ふっ、んンッ❤ 、あぅ気持ちいぃ……❤、いい、マンコが震えちゃうっ、イカされるっ❤ 気持ちよくされちゃうぅ……❤」

葵「触ってないのにちんぽがぁ……あっ、あぅぅぅ〜〜〜」

司「あっ……❤ あっ……❤ んっ……❤」

葵「いぐ、いぐぅ……いひぃいいいいいっ、精子でるっ、でてるぅ……撒き散らした精子、口でうけとめなさいっ……」

司「(荒い吐息)」

葵「どろっどろに蕩けてぇ……感じてる、感じてるのねぇ……ふふふ、あなたって、私のマンコをいじるよりも精子の臭いをかいだときの方が、本気で勃起してないかしら？ 精子が口に入った瞬間、確かにビクって腰が震えたわよね。その手のひらに受け止めちゃった精子はそのまま飲みなさい？」

司「んっ……んぐっ❤ んぐっ❤ ぷはぁ……❤」

葵「いい飲みっぷり❤ あなたにとって必要なものは……やっぱり、マンコの快感なのね？それは、仕方ないわね。あなた、まったりチンポをしごいてるだけじゃ、満足できないのもしょうがないわ。あなたにとって必要ななのは……マンコでの快楽の覚え方ね」

葵「可愛いわね。

そんなにへなっと倒れちゃって……
ほら、見せてみなさい？　あなたのマンコ……」

葵「ふふ、想像通り、ぴったり閉じたこどもマンコだけど……濡れかけてる」
司「葵さん……わたし、そういうの……やっぱりまだ早いですっ……そんな感じてないっ、濡れてないの……やだっ、いやですっ……そこは、駄目です」
葵「今日まで、貞淑にオナニーどころか、男の人のチンポを受け入れることすら考えてこなかったマンコ、私の精子で感じてくれて嬉しいわ」

葵「でも、そんなにイヤイヤいう必要はないじゃない。
快感の為とはいえ、そんなにここをいじられるのは怖い？」

司「あの……初めては、もっと、その……
ロマンチックなっ……初めてがいいんです……駄目ですか……」

司「勿論、いいわよ。
ふたなりだって、望むはじめてがあっていいのよ」

葵「大丈夫……処女膜さえ、傷つけなければあなたは処女のまま……
それに、ロマンチックな巡り会いをした王子様のおちんちんだって、この指よりはずっと太いのよ。あなたの前に現れた王子様が、乱暴な王子様だったときの為に慣れておかないと……最初のおちんぽで失望しちゃうわよ」

司「あぅ……」

葵「そしたら、悲惨よ？
おマンコの方が満足できるふたなりの子がおマンコしてて、わるい思い出が出来ちゃうとね……もう、一生満足できない。
本当に悲惨な未来が待ち受けちゃう。そんなの嫌でしょ？」

司「それっ……それは嫌ですっ……だったら、どうすればいいんですか」
葵「ふふ、だから経験させてあげるわ……マンコのよさ、今日でたっぷり覚えるのよ。嬉しいでしょう？」

司「（軽く喘ぐ）」
葵「生きている中で、こんなに気持ちよくなることなんて、そうそうありはしないわよ。ふ

ふ、尿道の穴をしごかれてるときみたい。もしかして、あなたって、何かを入れられるほうが、気持ちいい体の造りになってるのかも？」

葵「だとしたら、もっと、この気持ちよさ、味わっておかないといけないわね。あなたにとって、初めての体験だもの。この穴で気持ちよくなることはね。

ふふ、もどかしいかしら？

私の指の刺激でちょっとずつ高まってるみたいだけど、初めてだものね。

マンコの筋肉だって、気持ちよくなる方法がわかっていない状態……

気持ちよくなるために、まずはリラックスなさい……頭、なでてあげるわ。

誰かにしてもらうんだから、別にこういう方法でリラックスしたり快感を感じてもいいのよ。

前にご主人様におっぱいを吸いながら、おちんちんを気持ちよくしてくれと所望されるときがあって、最近まであれになんの意味があるのかって思ってたけどね、やっぱり誰かと居ないと味わえない快感がある以上は……こうやってね触れ合って、暖かさを感じることにはちゃんと意味があるのよね……」

司「(喘ぎ声強めに)」

葵「いいわね、ちょっとずつちょっとずつ快感を感じ初めてる。でも、身体がイクために必要な快感には達してない、そんなところかしら？

いいわよ、私の身体に甘えなさい？

あなたが女の子として感じるための練習ですものね。

こうやって誰かに受け入れられながら、快感を感じるのチンポをしごくだけじゃ、わからないこともあるわ……

ふふ、あなたもおっぱいが欲しいのかしら？

いいわよ。好きに甘えなさい？

女の子同士が快感を感じる方法はっ、一つじゃないものね……？」

司「んちゅっ……ちゅぅ……ちゅぅ……んっ……んぅ……❤ むぅ……んっ❤ ちゅっ……んちゅっ……んんぅ……❤ あぅ……んっ❤ んっ❤ んぅ……❤ んぁっ……❤ んっ……❤ あん……❤ いくぅ……❤」

葵「んふふ……ほんとに子供が出来たみたい？　それとも、妹？　こうやって、おっぱいを啜る姿は、あかちゃんと変わらないわね。おちんぽから我慢汁を垂れ流して、おっぱいをする赤ちゃんのおマンコ、だんだん、痙攣するようになってきたわ。ナカイキするのとは違う感触がくるわよ……昨日の射精が制限されてイクのとは違う、それでもチンポをしごかれているわけじゃいのにイける……精子がせり上がる」

司「ふぁっ……あっ～～～❤❤❤　ん～っ……❤　葵さぁん……❤　葵さぁん……❤　んっ……❤」

葵「……ふふ、あなたの腰びくびくしてる。いいとこアマイキってところかしらね。こういうのも、やっぱり個人個人で違うのかしら？　それとも慣れればマンコでいっただけで、精子、びゅるびゅるって出てきちゃうの？」

司「まだ……まだだめですぅ……❤
　折角葵さんにさわってもらってるのにぃ……❤」

葵「……ふふ、ちゃんと感じられて偉いわね❤
　そのまま抱きついたままでいいけど、こんなかんじかな」

司「あっ❤　あっ❤　それっ❤　きもちぃ❤　んっ❤　もぉいいっ❤　おまんこだけでもきもちぃのにぃ……❤　どっちも❤　なんてだめぇ……❤　んぉ……❤　もっとぉ……❤　気持ちよくなるっ……❤」

葵「チンポ、しごかれてびっくりしちゃったわね。マンコをいじられながら、チンポをしごかれる……変態的だけど、ふたなりにとってはこれが一番快感を感じられるの、そうでしょう？　チンポはどうすればイけるのか、理解してるものね？

葵「いいわよ。マンコを犯されながらの射精の快楽、覚えちゃいなさい……
　このまま、精子を出して、満足しちゃいなさい」

司「うぅ……いっぐぅ……イってるぅ～～～。
　でてるっ、でるぅ……でりゅぅ……❤　でますぅ……❤❤❤」

司「へひゅっ……ひゅぅひゅーっ❤　ふっ……❤
　えへへ、びゅーびゅーしたぁ……きもちぃ……❤
　んっ、おぅっ……❤　んぁ……❤

葵「ほら、びゅーっ、びゅーっ

あへあへしながら、射精するの、本当に気持ちよさそうね。
私を気持ちよくしてくれたお礼に、あなたのこと、本気でイカせてあげたわ」

葵「――ふぅ、随分イったけど満足したかしら？」
司「んぅぅ～～葵さん～～～」

葵「もう、そんなに涙目になって。
甘え癖がついちゃったのかしら……仕方ない子ね」

葵「うぅ……ふふ、もぅ聞こえてないか。
それだけ、イケるなんて……気絶しちゃうなんて。
かわいい……これじゃ、まるで上司というよりは先生やママみたいね……
ふぅ、私までまた勃起しそう」

葵「ふふ……ほんと、いいスタイル。
こんな身体じゃ、もてあますのも無理ないか……

はぁ……こんなの見せつけられたら
私まで、我慢できなくなりそう……
何かいい方法はないかしらね」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

5．挿入してみましょう

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

葵「司さん。久しぶりね……
　この部屋にくるのも、前におマンコでいくことを教えたとき以来かしら？」

司「あぅ……はい。
　すみません。また、お仕事でミスしちゃうなんて」

葵「いいのよ、今回のは不注意だし。
　大きなミスってわけでもないから
　でも、この館でだれよりも几帳面になったあなたが、あんな凡ミスをしちゃうなんてね」

葵「もういわなくても、分かるわ。欲求不満なのね？」

司「すみません。
　わたし、ちゃんとオナニーしてるんです。メイド長に教えてもらったお店で玩具を買って、休みの日は一日中……せっかく、私のお部屋も防音が聞くようにしてくれたのに……」

葵「でも、一日中オナニーして、それでもなお満足できないわけね」

司「はい……」

葵「どうしても満足できない？
　今のままで、一人で出来るエッチの限界は、出来てるんでしょう？　精子だって出し切ってる。それでも手を動かしちゃうだけ……？」

司「その、よくわかんないんですけど、イってもイっても体は満足するのに、心がなんか満たされなくて、どうしても、おちんちんに手が伸びちゃうんです
　これ、私、どうすればいいか分からなくて……」

葵「ねぇ、もしもだけど。
　どうしても心が満たされないっていうなら――
　私とセックスしてみるのは、どうかしら」

司「そ、それは……」

葵「まぁ、そうよね。私はふたなりだけど女性だし、あなたの白馬の王子様にはなれないわ

ね。でもね、どうしても辛そうなあなたを、メイド長の職責以外でも助けてあげたくなったのよ

それに、せっかく相談に来てくれたあなたを何もしないで返すのはね

ちょっと、気が引けるのよ……」

司「んっ……葵さん……」

葵「ふふ、何度もあなたにエッチな姿を見せてきたけど、こうやって押し倒すのは初めてな気がするわ……せめて、ふたなりの先達として、一人の人間として、あなたの身体、きもちよくできるように、努力してみようかしら……

葵「ほんと、綺麗。

あなたの乳首ちゅっ……ちゅっ、ちゅる……もどかしいかしら？

直接触らない、でも身体にぬくもりは伝わるでしょう？

あなた、生粋のネコなのね。

おちんちんで女の子に迫るより、迫られた方が満たされる。」

葵「いいわよ。ちゅっ……そのまま、受け入れなさい

私に出来ること、全部してあげる。

これまで教えてきたこと、おさらいしてあげるわ……

ふふっ、ちゅっ……んちゅ……❤」

葵「もう、あなた、チンポが気持ちよくしてて主張しちゃってる❤

イキ癖のついた大きさと射精量だけがとりえのチンポ……」

葵「いいわよ、自分で触っても——

でも私に触ってもらったほうが、ずっと、ず～っと気持ちいいの。

知ってるでしょう？　だったら、私の愛撫で、もっともっと感じなさい」

司「（ちょっと大きめに喘ぐ）」

葵「裏筋、指でなじられただけで、びくびくしてる。

もっと触って欲しい？　だったら、あなたからも私に奉仕して頂戴？」

司「ふぁい……わかりました」

司「(おっぱいに埋もれたまま喘ぐ)」
葵「んっ……あなた、それすきねぇ。抱きしめられたまま、おっぱいに顔をうずめちゃって、そうやって私のチンポを触るなんて、んぅっ、上手よ……❤」

葵「司さん。チンポをいじるのが本当に上手❤
そうやって優等生面で、チンポに甘える練習をずとしてきたのね……
いいわ、そそるわよ、その媚び方……まるで、本物のネコちゃんみたい」

司「んあっ……ゃっ❤……やぁ……❤ 司のおちんぽ❤ 葵さんのとくっつけられてぇ……それぇ……❤ ぷにぷにですきぃ❤ 葵さん……もうだめぇ……だめえですぅ……はいぃ……甘えたいのぉ……❤ 葵さんのぬくもりかんじたいよぉ……❤」
葵「そのまま、チンポとチンポくっつけて、みゃーみゃーなきながら、快楽を受け入れなさい？ ふふ、あなたの愛撫上手いけど、それ以上に弱いチンポね。腰がもう砕けちゃってる……どうしたの？ もっと甘えたいの？ ほんと、あなたって女の子ね」

＊司ちゃんの喘ぎ声に、キス音だけかぶせる。
司「んっ……❤ あっ……あん……ちゅっ……ちゅっ……」
葵「いいわよ、キスしましょうーーれちゅっ、んっ……」

葵「そのまま、おまんこ、いじってあげる。
んっ……ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……もう、あなたびしょぬれじゃない。

今まで、どれだけ多くの玩具を入れてきたのかしら？
私の指どころか、このままチンポが入っちゃうくらいじゃない。

いいのよ？ 一人じゃ満足できない領域って、あるものね」

葵「もしかして、あなたが満足してたのって、私がいたから？
どうでしょうね。実際に入れてためさないと、わからないわ……」

司「お願い……葵さん……いれて」
葵「なぁに、あなた。そういうおねだりは……
私にも伝わるようにちゃんといわないと分からないわよ？」

司「葵さんの、太くて、おっきなふたなりチンポ、私のおまんこに、ください……入れてください、私の処女マンコをオナホールみたいに使ってぇ、射精してください……中出ししして

ください♥」

葵「えぇ……そんなのだめよ」

司「んぇ……」

葵「駄目ったら駄目……」

司「なんでぇ……さっきは、入れるって言ったの……」

葵「だって、あなた、まだ完全に墜ち切ってない。
性欲に本気になっていないもの……」
ほら、玩具を貸してあげるわ。あなたの乱れてる姿、私に見せなさい……
なにがいい？　ディルド？　プジー、それともオナホール？」

司「うぅ……ぜんぶぅ……全部がいいです」

葵「全部？　もぉ……ほんと、いやしんぼなんだから。
でもいいわよ……ほら、見ていてあげるから、使いなさい？
それで、私に……あなたを犯したいと思わせてみなさい？」

司「分かりましたぁ……司、やりますっ……できましゅ…」

司「ひゃい……♥　んっおっ……っ（プジー）
んっ……うぅうううぅうううっ……（オナホール）
ぷじー、おなほーるっ、いれましたぁ……

つぎ、はぁ……
んっ……んいぃぃぃぃ♥　はいったぁ……（ディルド）

このままっ……こしっ、ふるぅ……♥
あぁ〜〜〜っ♥　だめぇっ♥　恥ずかしい所をみられりゅ♥
れもっ……♥　何時もしてるのはっ♥　んぉっ♥　こういうおなにーなのお♥

んっ、んっ、おほっ、おっ、おっ、おぉ〜〜っ♥
おぅ、まんこぉ〜〜〜まんこ、いぐぅ……もぉ……いぐぅ♥
でないぃけど……♥　おっ♥　んぉっ♥　おぉっ♥　おぉ〜〜♥」

葵「あらぁ、すっごいエッチな光景。
オナホールでチンポしごきながら、腰をがんがん振って。
あなた、そんなに壮絶なオナニーを毎日してるの」

司「んぁ〜〜〜♥ してるっ……してますっ、でも満足できないんですっ♥」

葵「そうなの？ どうして満足しないのかしらね……」

司「わかんにゃいっ、ないっ、いっ、いぃ〜〜〜いぃ〜〜
いひぃ〜〜〜いぃ〜〜ひゅ〜〜ふ〜〜♥ いぐぅ〜〜〜♥♥♥」

葵「あらっ、もうイクの？ 私のおちんぽを前にして……
玩具で情けなくイキ狂っちゃうのかしら？」

司「いぎますっ、もういぎますぅ……
いいんですぅ、満足、満足しにゃきゃいいのっ……♥
おっ、おっごっ……おひょ〜〜〜っんっうううう♥♥
イギッいっでるぅ、全身、いっでるぅうううううう♥♥

葵「そうよね、そうおうオナニーを教えたのは私ですものね。
それにしても、エッチな腰振り、私もお猿さんになっちゃう。
んっ、ふふ、ごめんなさい。
ちょっと、我慢できなくなるくらい、すっごいおなにー…
…私も、シコりたくなっちゃうわ……」

司「おねがいしますっ、おねがいしますぅ……
ぎゅってして、くださいっ、こわいぃ、もぉ……
すきなんですっ、すきっ、なんですぅ……」

司「ずっと、メイド長、葵さんのこと、考えてシコってるんです
おまんこほじってるんですぅ、この疼きはもう、止まらないんですぅ……
おねがいだからぁ……おねがいしますからぁ……

葵「もぉ……それ、本当？」

司「うそじゃないもん……うそじゃないもん……」

葵「仕方ないわね。
あなたに免じて、ほら、その玩具を抜きなさい？
あなたのこと、抱いてあげる。
私が……直接、ご奉仕の方法をおしえてあげる」

司「はいっ……❤　葵さん……」

葵「ほらっ、腰を上げなさい。
私が使いやすい姿勢になるの」

司「はいっ……はいっ……はいぃ……❤」

葵「そのまま、マンコを見せ付けて……いいわね。
表情から、姿勢から、さっきまでの余裕がある媚びた姿勢じゃない
本当にちんぽを欲しがるそんな格好になってるわね」

司「お願いします……このまま、司のマンコ使って下さいぃ❤」

葵「いいわよ、いれてあげる。
だめっていっても、もう我慢できないけど、ねっ……」

司「喘ぎ声アドリブ」
葵「んん〜〜っ、本当にいいマンコね。
指でイキ方を教えてあげたとき以上に、絞まって、チンポをくいしめてくるっ、私のチンポが入るほどに拡張されてるのに、絞まりもいいなんて、ちゃんと練習したのねっ、いいわよ、食い絞めて、ちんぽの感触を味わいなさい。
私の腰振りの感覚の中で、玩具で学んだいい場所の快楽を反芻するのよ……」

葵「んっ……さっきイっただけのことはあって、マンコの中がよく解されてる。チンポに肉がこびてっ、それにっ、あなたのマンコ、本当に名器ねっ、チンポに引きずり回されて、直、食いついてくるっ、腰っ、止まらなくなってるっ、そんなに精子欲しがって……イってるだけのことはあるわっ、もうアへって、痙攣してるっこのマンコ、ほんとっ、見込み以上の快感ねっ……

葵「いいわよ、あなたのマンコ、もっといじめてあげるっ、こうやって気持ちいいところを擦られるとっ、いいでしょう！？　いいわよねっ、媚び方が一段と上手くなったじゃない。

白馬の王子様とのあまあまエッチの妄想はどうしたのかしら？
私とのふたなりチンポのエッチっていう……
現実に、塗りつぶされちゃったのかしら？
ほらっ、もっと腰を上げなさい？……いけない子ね。
生ハメに墜ちて、自分でオナホールズリコキして……何度も何度もいってるのに、これは指導なのよ？　満足して明日の仕事をするための指導なのよぉ……」

司「それでもっ　いいぃ、いいでしゅ……いいれしゅからぁ……
葵さんの精子くださいッ、もっと犯して……中出ししてくださいっ」

葵「そう、じゃあ腰を突き出して、犬みたいに、四つんばい、できるでしょう？　ふたなりにバックで犯して貰う経験なんて、そうできないわよ？　今までのように、容赦がある位置で収まらないんだから……ねっ」

葵「いぃ〜〜あなたっ、いいわ……私も本気になるっ」

司「んっ……おっ❤　おっ❤　んぉ❤　おっ❤　ほっ❤　ほおっ❤　おくぅ……おぐぅ……❤　いぐぅ……❤」

葵「精子、ぐつぐつしてきたわ。上ってきた。あなたに奉仕されて、オナニーを見せ付けられて、イキ狂う準備が整ったってとこかしら。

葵「このまま、出してあげる。
さ、プジーを抜きなさい？　まず、あなたがイって、私のちんぽを楽しませるの。できるわよね？」

司「ひゃいっ……❤❤❤　んぉっ……おあっあっあぁあぁあぁあ゛ぁ゛ぁ゛❤❤❤　でりゅぅ……ざーめんでるぅ❤　でてるぅ……❤　でてるっ……❤❤❤　あっ……んっ❤　イッグ、イッグイグイグイグイグイグぅ❤　ぁぅ……んぉおおぉおお❤　ひゅ〜〜っ……んぉっ……❤　おぉ゛〜〜❤❤❤」

葵「っ……っくぅ〜〜いいわ、いいわぁ……イってるぅ、あなたのマンコ、ガチでいってるぅ、ホォオオオオッ、これっでるわぁ、本気で射精っ、いっぐ、いぐっ、いっくぅうううう……ぁ〜〜っ、わかる、かしら？　あなたのマンコ、精子を飲み込んで、もう……こんなに……どろどろになってるぅ……❤」

司「えへっ……えへっ……きもちぃ……❤　きもちぃよぉ……❤」

葵「あなた、残念だけど、もう、元のオナニーには戻れないわよ……？
　こんなエッチしてくれる人なんて、そうそういないんだから……」
司「いいれしゅ……わたし、メイド長がいれば……これでよかったです……」

＊司ちゃん気を失う。

葵「もぉ……私の気も知らないで。

私、貴方とつりあわないなんて、わかってるのにね。
それでもいいのかしら、あなた、私の事好きなの？
それは、愛してるっていうのかしら？
同じ場所を見つめることができるのかしら……

それでも、きっといいのよね。
私たちにとっては……だから、明日からも、普段どおり頑張りなさい」

司「――はい、葵さん」
葵「ふふ……ほんと、可愛い子ね」